
鯉のぼり

双月 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鯉のぼり

【Nコード】

N4638T

【作者名】

双月 奏

【あらすじ】

中学1年生の女子バスケット部部員は新人戦での失敗にやきもきしていた。

そこに五月五日あの日がやってくる。

五月雨、こども、おやすみ

の三題話！

ダンッダンッダンッ……………

鼓動とボールが断続的に跳ねる音、周りの「がんばれ〜」と言う黄色い声援、前に立ちはだかる名前も知らない女の子の動き、どれもが頭の中でグルグル渦巻いていた。

スコアボードに書かれた点数は四十五対四十六。残り時間は二十秒を切っていた。

目に見える仲間には皆ディフェンスに張り付かれて身動きが取れない。わたしがどうにかするしかない。と足に力を込め目の前の女の子を強引にすり抜けようとする。

左にワンステップ。後は右に全力で抜けてシュートこれで完璧なはず。そう信じて一気に身体を動かす。

左、動きに合わせて目の前の子も身体を動かす。この瞬間だ、ここを抜ければ良い。

自分に言い聞かせボールを一気に前に押し出しながら、駆け出す。身体が軽くぶつかるが笛は鳴らない、いける！ そう確信してシュートを放つ。

ボールはゆるい放物線を描いて、自分の身長のは二倍は高さのあるであろう、ゴールネットへ向かう。

その瞬間は声援も、自分の鼓動も、他人の息遣いも、全てが消えた様に感じた。

ガコオン

ボールはネットの枠に当たり、大きな音を立てる。「入って！」心の中で叫んだ。

だけど、祈りは空しく、ボールは淵を二回転程して、枠の外に転げ落ちた。それと同時に笛が鳴る。

時はゴールデンウィーク真只中、わたしのデビュー戦である新人戦は、特に良い所も無く、あっけなく幕を閉じた。

「はあ……最後のシュート、決まっていればなあ」

夜、ベッドに横たわっても、いまだ昼間の熱が冷めていなかった。
「結構自信あったんだけどなあ……」

バスケット部に入学してまだ一ヶ月、だけど小学生の頃から運動神経も良く、男子に混じっても負けず劣らず、であった自分からすればシヨクな結果だった。

「最後惜しかったねー」「どんまい！ まだまだこれからだって」

「もう少しだったのにねー」

仲間達の言葉が蘇る。どんなに励まされても悔しいのは変わらなかった。

そうこう考えているうちに、昼間の疲れからか瞼が重くなっていく。こんなに悔しくても眠くなるものなんだな……そんな事を考えながらわたしは眠りに落ちた。

わたしはよく夢を見る。小さい頃懸命に逆上がりを練習した夢。

運動会のかげつこで二番だったときの夢。リズム感が無くてダンスが上手く踊れない夢。どれも上手くいかなかったときの夢ばかりだ。でもわたしは、その度に練習してきた。何も最初から運動神経が良かったわけじゃない。一所懸命練習したから男子ともやり合えるほどバスケットも出来るようになったのだ。

案の定、わたしは今日の出来事を夢で見た。寝起きは最悪だったが、朝からバスケットボールを持ってジョギングに出る。

しばらく走った後近くのバスケットゴールのある公園で早速練習を開始した。天気は曇り。最初は涼しかったが、次第に湿気が汗を生み服が身体に纏わり付くように重くなる。

ある程度練習しているとポツリポツリと雨が降って来た。まだまだ練習したりない気がして気分も晴れない。

そのまま駆け足で家まで戻りシャワーを浴びて居間でテレビを見る。

テレビでは近くに迫っている子供の日の為か鯉のぼりを中継していた。正直女のわたしには関係の無い話だった。

翌日も雨……この時期の雨は長くじつとりとしていて、憂鬱な気分になる。五月雨と言う奴だ。

練習がしたい。わたしの心はそれでいっぱいだった。

ゴールデンウィークも後半五月五日。子供の日、この日もはっきりしない天気でじつとりとした雨が降っていた。

しかしいい加減居ても立っても居られなくなったわたしはジョギングだけでも、と外を走る事にした。

しばらくいつものコースを走っていると小さな男の子が玄関先で黄色い傘を差しながらじつと立っているのが見えた。

「ぼく？ 何しているの？」

思わず声をかける、その子の真剣な眼差しが気になったからだ。

「あのね、鯉のぼりが泳ぐのを待っているの！」

男の子の見上げる先には小さな、小さな、おもちゃの様な鯉のぼりがあった。

あんな小さな鯉のぼりでも泳ぐ姿を見たいものなのだろうか？

子供の考えはいまわからなかった。

わたしのジョギングコースは同じ道を行って帰るため、帰りも同じ所を通る。なんとなくそんな気はしていた。男の子はまだ泳がない鯉のぼりを見つめていた。わたしはじれったくなって思わずまた声をかける。

「ねえ、ぼく？ 今日風が無いからいくら待っても無駄だと思うよ」

ところが声をかけても男の子はそこから動こうとしなかった。

「おばあちゃんが言っていた。鯉のぼりが泳ぐと元気になるって、だからおばあちゃんの代わりに鯉のぼりが泳ぐのを見るんだ！ おばあちゃん最近元気無いから……」

この子は……優しい子なんだな。でも風は吹かない。五月の嫌な雨だけがじとじとと降り続いていた。

ああ、もうじれったい！

「ぼく？ あの鯉のぼり取って来られる？」

わたしはそう提案していた。

男の子は家に入ってしばらくするとベランダから顔を出し、鯉のぼりをつたない手つきで外し、わたしの元へ持ってきた。

「ありがとう。ちよつと借りるね」

そう言つて鯉のぼりを受け取り男の子から距離を取る。わたし傍から見たら怪しいなあ……そう思いながらもそうせずには居られなかった。ただ待つているのは性に合わない。

わたしは鯉のぼりをしつかり持つと思ひ切り駆け出した。男の子の前を颯爽と翔ける。

「はあはあ……どう？ 泳いだでしょ？ こんな雨の中でもこんなに元気に泳いだんだからおばあちゃんもきつと元気になるよ！」

男の子はしばらく呆気にとられていたけれど、にっこり笑つてわたしから鯉のぼりを受け取ると傘を落として同じように走り出した。

「ちよ、ちよつと君。濡れちゃうよ！」

「だつて、お姉ちゃんも元気無さそうだったから！ ほら、泳ぐのを見て！」

男の子は一所懸命わたしの前を行ったり着たりする。その姿が可愛くて微笑ましくて、勇気が沸いて来た。

「そつか、わたしも落ち込んでいたのか」

今になって五月の雨にイライラしていたのも、居ても立っても居られなかったのも、理解出来た。

「はい、お姉ちゃんにこれあげる！」

そういつて男の子は小さな、小さな、鯉のぼりを差し出してくれた。

わたしは少し躊躇ったけれど、この子の優しさに負けてその鯉のぼりをもらってしまった。

夜、机の上に飾った鯉のぼりはもう泳いでは居ない。だけど……
今日はいつもと違う夢が見られる気がした。雄大に五月の雨上がり
の青空を泳ぐ大きな鯉のぼりに虹のイメージ。それを男の子と二人
で見上げる夢。きつとあの子のおばあちゃんも大丈夫だろう。なん
の確信も無いけれど、机の上でしなだれた鯉のぼりを見ると、きつ
と大丈夫だと思った。

「おやすみなさい」

机の鯉のぼりにこつこつと吹く事で、わたしの夢は素敵な夢が多くなっ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4638t/>

鯉のぼり

2011年5月23日02時40分発行